
Let it be !

広崎咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Let it be !

【Nコード】

N4481Q

【作者名】

広崎咲

【あらすじ】

あらすじと言つほどのものではありません。

午前7時。携帯のアラームが鳴り響く。眠い。とりあえず無視。
しかし、5分後にまたアラームが鳴る。

「クソ！うぜーなあ！」

あたしは自分の携帯に悪態をつきながらも、のそのそと起き上がった。洗面所で歯を磨く。鏡の中の自分はこの世の終わりを迎えるかのようなひどい顔をしていた。そうだ。あたしの人生は終わっている。そう考えながら、あたしは自分自身を嘲笑した。鏡の中の女は今にも死にそうな死神のような顔をしていた。歯を磨き終わると、化粧を始める。自分の顔にさまざまな粉やらなんやらを塗りたくる。あたしは化粧が嫌いだ。何だってこんなめんどくさいことを毎朝やらなきゃいけないのさ。でも、あたしは化粧なしで外を歩くことができない。仕方なく毎日この作業を繰り返す。30分後、なんとか化粧が完成した。あたしは貴重な睡眠時間と引き替えに、すっぴんの1.5倍の大きさの目を手に入れた。朝食代わりにコーヒースする。そして、タバコを2本吸い終わると、あたしはスーツに着替え、仕事場へと向かった。

午前7時。母の声で僕は目を覚ました。一階へ降りるとトーストのいい香りがした。ほのかにハーブの匂いもする。ハーブティーかな。僕は食卓の自分の席につき、目の前に置かれているトーストをかじった。キッチンの方から足音が近づいてくる。やけに軽快なその足音は高校生の妹のものだ。

「おはよう、陽子。」

「おはよう。今日もいい天気だよ。」

「そうだな。風もないし気持ちのいい朝だ。」

僕がハーブティーをすすっているうちに陽子は僕の1.5倍の速さで食事を終え、すぐさま家を出てった。

「あの子、朝練があるのよ。」

母がそう言いつつ僕の正面の席に腰を下ろす。

「今、何時？」

「7時30分よ。」

「そっか。じゃあ、そろそろ着替えなきゃ。」

僕はハーブティーを飲み干すと自分の部屋へ向かい、スーツに着替え、ネクタイをつけた。鞆を持ち、玄関で革靴を履いていると、背後から母の足音が聞こえてきた。ほのかに、唐揚げの匂いにする。

「ごめん。弁当忘れてたね。」

「あら、よくわかったわね。」

と、言いつつ、母は僕のカバンの中に弁当を入れてくれた。

「じゃあ、お仕事がんばってね。」

「行ってきます。」

僕は母に笑顔を向け、職場へと向かった。

駅についたあたしは、超イライラしてた。すっごく大きな怪物がやってきて、あたしもともこの駅を踏みつぶしてほしいと思うくらいイライラしてた。何故か。それは、どっかのバカが朝っぱらから電車に飛び込んで自殺したからだ。もう、かれこれ30分くらい待たされている。仕方ないから、駅の隅っこにポツンとある一体誰が使ったというベンチに座ってタバコを吸っていた。ポケットから振動が伝わる。携帯を取りだしてみるとマネージャーからの着信だった。ちっ、めんどくせえな、と思いつつも電話に出る。

「はい、もしもし？」

「もしもし、ひろみちゃん？いまどこ？」

朝っぱらからこいつの高い声は頭に響く。

「今、駅ですよ。どっかの馬鹿が飛び込み自殺して電車が全く動かないんですよ。」

「マジ？もう、勘弁してよ。」

それはこっちのセリフだ。

「て言うわけで、いつ現場に行けるか分かんないんですけど、どうしたらいいですかね？」

「ちよっと待って。監督に相談してくるから。あとでまた掛け直すわ。」

やれやれ、とつぶやきながらも、私はすこしラッキーだと思った。今日の現場は相当激しいものになると予想していたからだ。入りが9時で、終了時間が24時となっていた。あのマネージャーは厳しい仕事ばかり持ってくる。このまま、永遠に電車が動かなかつたらしいのにな、とぼつりと思う。あたしが5本目のタバコに火をつけていると若い男が話しかけてきた。

「あの、隣に座ってもいいですか？」

なかなかに雰囲気の良い男だったのであたしは了承した。

「どうぞ。」

僕が異変に気付いたのは駅に入った時だった。いつも以上に構内から人の気配がした。僕は人にぶつからないように細心の注意を払いながら改札へ向かう。しかし、人の壁に阻まれた。何かあったのかな。僕は駅員を探し、尋ねようと思うがこの人の多さではそれは無理だった。気付けば僕の周りは360度人で埋め尽くされていた。頭がふらふらする。軽いパニック状態になりかけた時、自分のポケットが振動するのを感じた。やばい、部長からかな、と思って慌てて電話に出る。

「すみません。なんだか駅が混雑してて。」

と必死に謝ると、携帯からは笑い声が聞こえてきた。母の声だ。

「なに言ってるんのよ。私よ。それよりも誠、大丈夫？今、ニユースでやってるんだけど、人身事故があったらしいじゃない。」

「人身事故？それでこんなに人がいるの？」

「しばらく、電車動かないみたいよ。危ないから、今日はもう帰ったほうがいいわよ。」

「いや、そんなことで休めないよ。やっと見つけた就職先なんだか

ら。」

「…そう。でも、いつもと違うのよ。大丈夫？」

「大丈夫だよ。それじゃ。」

僕は電話を切ると、避難場所に向かった。母と話したことで少し落ち着いたみたいだ。その避難場所は僕が中学生の時、母が駅員さんに言って作ってもらったものだ。駅の一番端っこにあるベンチ。僕は駅で不測の事態が起きた時はそこに避難するのだ。なんとかたどり着くと、そこには先客がいるようだ。タバコの匂いがする。サラリーマンかな。と、思いつつ僕は声をかける。

「あの、隣に座ってもいいですか？」

「どうぞ。」

その返事の声は僕の予想に反し、とても美しいものだった。

あたしの隣に男が腰かけるのとはほぼ同時くらいにマネージャーからの着信があった。

「もしもし。どうなりました？」

「ああ、監督さんと相談したんだけどさ、とりあえずひろみちゃんなしでシーンとつてくわ。今回、ひろみちゃんは次女役だったでしょ。朝のシーンなんだけど、次女は朝練にいつていないってことにするから。放課後のシーンからの登場でつてことで。それじゃあ、電車が動いたらすぐ来てね。」

「はい。分かりました。」

「はい。じゃ、電車乗ったらまたメールして。」

「了解です。」

あたしが電話を切ると、隣の男が、あの、と話しかけてきた。

「もしかして、女優さんですか？」

電話の内容聞かれたのか。つたく、あいつの声は高いからよく響くんだよな。それにしても、女優ねえ。まあ、女優っちゃ女優か。『そうです。』

すると、男は納得したような顔で

「道理で。」

とつぶやいた。あたしはそれを聞き逃さなかった。

「それってどういう意味？」

自分で言うのもなんだが、あたしの外見はさして美しいわけじゃない。この完ぺきな化粧を纏ってやっと、中の上くらいだ。

「え？」

男は困惑の色を浮かべる。

「道理で、の続きを教えてよ。」

あたしが詰め寄ると、男は照れたようにおずおずと言った。

「いや、道理できれいな声してるなあつて。」

…声か。なんだ。外見のこと言ってきたらブチ切れてやろうと思つてたのに。そう言えば、中学の時、音楽の先生に褒められたっけ。ひろみはいい声してるって。

「ありがとう。」

あたしはぶつきらばうに言った。

「いえ。思つたことを言つただけですから。」

そこで、あたしは改めて男の方をまじまじと見た。彼はスーツをきちつと着こなし大事そうに鞆を脇に抱えている。そして、先ほどは気付かなかつたが、さらにその横にスティックのようなものが置かれてるのに気付いた。

「あなたって、手品師？」

「…手品師？」

「いや、なんとなく。」

「僕はしがないサラリーマンですよ。」

「ふーん。じゃあさ、それ何に使うの？」

あたしはスティックを指差して尋ねた。

「…それって？」

男は困つたように言った。

「だから、それよ。」

あたしは再びスティックを指差す。男はさらに困惑していった。

「それ、じゃ分からないですよ。」

そこで、あたしはブチ切れてしまった。

「だから、それつつてんだろ！！そのへんな棒だよ！！あんたの目は節穴か！」

すると、男はさびしそうに笑って言った。

「そうです。節穴なんです。僕の目。」

僕は全盲だ。生まれた時から全く目が見えなかった。光すら届かない全くの暗黒の世界を僕は24年間生きてきた。しかし、24年もその状況で生きてきたらなれるもので、今では大抵のことが一人でできる。僕は目が見えない分、耳と鼻が非常にいい。大抵の情報はそこから読み取れる。足音を聞けば、知り合いなら大体誰かわかるし、声のトーンで相手の喜怒哀楽も分かる。その点、健常者よりも優れているとも言われる。見える人たちは相手の表情に騙されやすいが、声は嘘をつかない。

「生まれつき見えないんですよ。僕。」

彼女のはつと息を飲む心配が伝わる。とりあえず、僕は続ける。

「この棒は、僕の目です。これがないと外を歩けません。」

「…ゴメン。節穴なんて言っちゃって。そんなつもりはなかったの。」

彼女の声のトーンが変わる。ぐっと湿っぽくなった。後悔の声。

「気にしないでください。それにしても、電車、動きませんね。」

僕はとりあえず話題を変えようとした。

「そうね。あなた、時間大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。会社では、僕が目が全く見えないようにね、他の社員には全く僕が見えないんですよ。多分、今、僕が会社にいないことも気付かれてないんじゃないかな。」

沈黙が生まれる。しまった。つい、リアルな話をしてしまった。

僕のリアルな話は人を困らせる。どうリアクションをしたらいいのだろう、と。そして、大抵の人は僕に同情する。やめてほしい。僕

は同情を求めてこんな話をしているわけじゃないんだ。しかし、彼女の反応は同情なんて生ぬるいもんじゃなかった。

「じゃあ、なんであんな会社に行くの？ いてもいなくても同じなんでしょ？」

「…それは、」

「それは？」

「負けたくないから。」

そう、僕は負けたくないんだ。

「誰に？」

彼女の声は興味深々といった具合に弾んでいた。

「僕に。」

「へー。なんで？」

先に弁解しとくけど、僕は普段はこんなにぺらぺらと自分のことはしゃべらない。でも、この時は何故か次から次へと話してしまっただ。それは、一つに彼女の声が5月のラベンダー畑をそよぐ春風のように爽やかで、もう一つに、彼女が僕に全く同情してなかったからだ。

「例えば、君が僕と一緒にピクニックに行こうと誘ったとする。」

「あたし、ピクニックなんて嫌いよ。ハイキングなら好きだけど。」

「じゃあ、ハイキングでもいいよ。その時、僕はインフルエンザにかかっていて仕方なくその誘いを断る。」

「ふうむ。それで？」

「すると、君はどう思うか？」

「せっかくデートに誘ったのに残念。」

「違うよ。大体の人は『あ、誠は全盲だからハイキングには行けないのか。悪いことしちゃったな。』って、そう思うんだ。」

「あんだ、誠って言うんだ。いい名前ね。」

「ありがとう。でもね、僕はインフルエンザでいけないんだよ。そこに僕の目が見えるとか見えないとかは関係ないんだ。」

「そうよね。」

「つまり、僕には常に言いわけが用意されているんだ。ホントはそれが原因じゃないのに、みんなそこに結び付ける。」

「楽でいいじゃない。」

「楽だよ。確かに楽だ。でもね、僕はその楽さに甘えたくないんだ。自分に負けたくないんだよ。だから、僕は今日も会社に行く。」

「ふうん。誠は強いだね。」

彼女はタバコに火をつけ、しばらく黙ってタバコを吸い続けた。

「ひろみさんは時間大丈夫なの？」

「大丈夫よ。っていうか、なんであんな、あたしの名前知ってるのよ。」

「さっきの電話で聞こえてきたから。」

「そう。声でかいのよね。あいつ。」

「次女役なんだよね。ＴＶドラマとか？」

「違うわ。」

「じゃあ、映画とか？」

「違う。」

「じゃあ、何の撮影なの？」

彼女はしばらく黙った。どうやらタバコを吸っているようだ。遠くで喧騒が聞こえる。電車は一向に動かない。彼女はプハー、と煙を吐いた。そして、おもむろに切り出した。

「ＡＶの撮影よ。あたし、ＡＶ女優なの。」

始まりは２年前。フリーターとして東京で働いていたあたしは渋谷のマックであいつと出会った。あのクソマネージャーだ。あいつは昔から声が高く、そして話がうまかった。ＡＶ女優という職業がまるで宇宙飛行士か総理大臣のようにすばらしいものだと言った。

まだ、１９歳だった世間知らずのあたしはまんまとその話に乗った。しかし、現実とは違った。仕事はあたしの心と体に深い傷をつくった。給料も思ってたほどよくない。それでもあたしがまだこの仕事を続けているのは、今更まともな職に就けないだろうというあきらめて

いるからだ。あたしは汚れている。どうせ、汚れているのなら、汚れきってやろう。限界まで汚れて、そして稼いだお金を持ってニューヨークに永住しようというのが今のあたしの人生設計だ。

「これから、次女役で長男役の男優とやりまくってくるの。」

誠はびつくりしたような顔であたしの方を見ていた。いや、見えではないのか。

「そうなんだ。」

「意外だった？ 案外そこら辺にいるものなのよ。AV女優なんて。」

「初めてあったよ。」

「そう？ みんな自分の正体を隠してるだけかもよ？ 自分からAV女優なんです。なんて言ううやついないわよ。」

「でも、今、僕の目の前にいる。」

あつ、そうか。思わずあたしは納得してしまった。なんであたしはこいつに自分の正体ばらしてしまっただろう。

「あんたは特別なのよ。」

「それは、僕の目が見えないから？」

「違うわ！」

あたしはとつさに否定した。

「じゃあ、なんで？」

「笑わないでよ。あんたとはさつき会ったばかりだけど、あんたなら信頼できるなって思っちゃったのよ。」

すると、誠は笑い出した。腹を抱えて笑っている。

「ちよつと！ 笑わないでって言っただでしょ！」

誠は息をきらしながらも謝罪した。

「ゴメン。でも、会っていきなり信頼されてもなあつて。」

仕方ないじゃない。黒く、長すぎない髪。涼しげな目。スツと通った鼻筋。柔らかい物腰。しかし、その中心には強い芯がある。もしかして、これが一目ぼれってやつか。ちくしょう！ 惚れたら負けってホントだな。

「ねえ、あんた今、心の中であたしのこと軽蔑してるでしょ。」

「それは、ひろみさんがＡＶ女優だからってこと？」

「そうよ。世の中の人はね、あたしがＡＶ女優だって分かった途端にころつと態度を変えんのよ。まるで、汚物でも見るかのような目であたしを見るの。」

「でも、僕は目が見えない。」

「そういうことじゃなくて！あたしが汚れてんのは事実よ。それは仕方ないわ。でも、あたしはだれのために汚れてると思うの？それは、あんたたち男のためじゃない。あんたたちが性欲の処理として求めるから、ＡＶ業界は成り立ってるの。それなのに、普段は自分もお世話になつていくせに実際に女優に会つと相手を人間として扱わないのよ。ひどいと思わない？」

あたしは普段の鬱積を誠にぶつけた。ひどいやつあたりだと思つが止められなかった。

「僕は君のことを軽蔑なんかしないよ。君を軽蔑してるのは君自身じゃないか。」

「なっ、どうということよ！？」

「僕は今まで傷つきながら生きてきた。たぶん、君が想像している３倍は全盲つてことで傷ついてきた。でもね、そこから分かったことがあるんだ。」

「なによ？」

「人はそれほど他人に興味を示さないってことだ。僕らは他人に自分がどう見られてるかについてばかり意識する。あるいは、他人に正確に自分を理解してもらいたいってことを。」

「つまり、あたしが自意識過剰だったってこと？」

「違うよ。君だけじゃない。人間はみんな自意識過剰なんだ。そういう風にできてるんだよ。みんな、自分・自分・自分って自分本位なんだ。だから、肩の力を抜いても構わないと思うんだ。みんな、思ってるほど他人を気にしてないから。」

誠の言葉を聞いた時、私の心と体にのしかかっていた重力が半分くらいになつた気がした。ふわつと心が軽くなつた。

「大学の講義みたいね。」

「全盲者の全盲者によるＡＶ女優のための講義。」

「なによ、それ。」

「だから、君が自分の職業が辛くて辛くて仕方がないなら、辞めればいいんだよ。全く目が見えない僕でも何とか生きていけるんだから、君もきつと大丈夫だよ。」

「ありがとう。」

その時、駅内にアナウンスが流れた。ようやく、電車が動き出すとのことだった。誠はスティックを持ち、改札に向かおうとした。

「それじゃ、僕は会社に行くから。」

あたしは慌てて誠を引き留めた。

「ちよつと待つて。」

「なに？」

あたしは、まるで中学生の女の子のようにおずおずと言った。

「あの、今度、あたしとハイキングにでも行かない？」

その日、あたしはマネージャーに連絡して仕事を辞めた。そしてそれ以来、あたしは化粧をしなくても近くのコンビニくらいなら出歩けるようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4481q/>

Let it be !

2011年1月27日14時40分発行